

ひまわりでの活動は二カ月に一度、2時間程度の訪問である。その間、利用者本人の意思による相談は少ない。利用者は、職員に勧められて第三者委員に相談するケースはある。ここの数年の間、第三者委員として利用者には認識されているが、この人だったら何でも相談できるというゆるぎない信頼関係を築くまでには至っていない。しかし継続して第三者委員を続けることで、利用者の目線により近づくことができ、見えてくることが多々あると信じて活動している。

相談事例 1, 利用者 A さん

グループホームの日常生活のリズムや決まりについていけない。一晩でも外泊してゆっくりしたい。(食事の仕方, お風呂の入り方・洗濯物の順番などについて入居者に意地悪されるという訴え)。

>相談後の経過

Aさんは、60年以上一人で自由に暮らしてきた方なので、グループでの生活になかなかなじめないようであった。幸いにもAさんの信頼するヘルパーが一人いて、その方がAさんの話を傾聴し、またスタッフも日常的に見守り支援を続ける。

Aさんは以前に高齢者の世話をすることに生きがいを持たれた経験があり、本人の同意のもとに、時間を経て、同じ年代の方も暮らしている空きのあった障害者施設に入所される。

相談事例 2, 利用者 B さん

グループホームでの人間関係がうまくいかないで困っている。入居者の一人が自分にばかりに何かと困った要求をしてくる。対応しないとつつかれたりする。スタッフに訴えても何も解決しない。(Bさんは、世話好きでしっかりした方である)

>相談後の経過

スタッフとBさんが話し合ったうえ、一つの解決策として週末は自宅に帰って入居者と距離を置いている。

相談事例 3, 利用者 C さん

グループホームは楽しくないし、息が詰まりそうになる。部屋に鍵がないので他の入居者が勝手に入ってくる。それに早く一緒に住もうといってくれる人がいるのでこの機会にグループホームを出たい。相談をしてもひまわりやグループホームのスタッフは、分かってくれないし、ここには信頼できる人は一人もいない。

>相談後の経過

後にひまわりのスタッフは、Cさんの相手の男性と会い話し合う。男性にCさんのありのままを受け止めてもらえるとしても、ひまわりから離れることで支援の手が届かなくなる心配もある。また本人の意思の尊重という観点もあり、ひまわりのスタッフは悩む。

結果として利用者 Cさんは、他県で男性と生活を始める。男性の家族が Cさんを支え、子供ができるといふ知らせがひまわりにあった。

相談事例 4, 利用者 Dさん

家族にテレビの音量がやかましいといわれ悩んでいる。自室のテレビを一人で見ようかと思う。

>相談後の経過

Dさんはテレビを見て興奮するとつい音量を高くしてしまうようだ。Dさんが悩んでいることを家族に説明するとともに、Dさんも音量に気を付けることにより、今までのように家族と一緒に居間でテレビを見ることになる。

相談事例 5, 利用者 Eさん

現在グループホームで生活している Eさんは、一人住まいをしたいと考えている。担当のスタッフや関係者に相談しているがなかなか話が前に進まない。(Eさんには、自立したいという強い思いがある)

>相談後の経過

Eさん本人は自立できると考えているが、周囲のスタッフから見ると自立までにはなかなか時間がかかりそうである。本人の希望に沿って、自立に向けての力が付くように、時間をかけて支援をしていきたい。

相談事例 6, 利用者 Fさん

会えないと思っていた Fさんの実の母親が、突然グループホームで生活している Fさんを引き取りたいといまわりに申し出た。Fさんは慕い続けていた母親との生活に夢をはせて喜ぶ。ひまわりでは母親の突然の申し出でに対し、Fさんと母親の今後の生活に不安感を持つ。

>相談後の経過

ひまわりでは Fさんの将来を考えて成年後見制度を利用しようと考えていた矢先であった。母親には軽度の知的障害があり、男性の助言者がいる。Fさんの障害年金の管理に不安を感じ、母親に後見制度の利用を薦めるが同意は得られなかった。その後 Fさんは、ひまわりを離れて母親との生活を始める。

以上